

国立教育政策研究所 国際成人力研究会「成人力とは何か－OECD『国際成人力調査』の背景」
明石書店、2012年9月25日刊を読む

成人力とは何か－OECD国際成人力調査(PIAAC)の背景－

I 知識基盤社会とは何か

1. (1)近年、OECDでは「知識経済」や「知識社会」という用語を用い、日本でも「知識基盤社会」という用語が頻繁に使われるようになってきた。

(2)この「知識社会」や「知識経済」という概念は、経営思想家ドラッカーがその著書『断絶の時代』で提唱し、普及し始めたものである。

(3)同書で彼は、20世紀後半の大きな世界変化として、ワールド経済や起業家の勃興とともに、最も重要な変化の要素として「知識」を取り上げている。
2. (1)「知識は、過去十年の間に、最も中心的な資本、あるいは費用項目、経済資源となった。

(2)すなわち、労働力と仕事、教えることと学ぶこと、そして知識の本質とその使い方を変化させた」。
3. (1)「知識経済」に関する章で、彼は、マハループ(Machlup)の知識産業という考え方を踏まえながら、今後は、専門職や管理職、技術職といった知識労働者が増加し、知識が中心的な生産要素となり、知識産業が主となる社会を知識社会とする。

(2)知識労働者は、自ら知識や技能、道具を使いこなす技術者でもある。

(3)そこでは、知識が死蔵されるものではなく、実際に応用されて、生産される「知識」というものが持つ特性にしたがって、貨幣経済にみられなかったような新たな経済社会が発生していくというのである。

(4)この知識経済社会への変容については、その後多くの研究が行われた。OECDもまた、各国における知識経済への変化を統計的に検証し、2000年までに、数回の国際シンポジウムを行ってその成果をまとめている。
4. (1)この動向で重要な点は、工業化社会から知識社会への移行の中で、成人に必要とされる生活や職業の知識、スキル、そしてリテラシーが変化しているという点である。

(2)実際、1995年に刊行された最初の国際成人リテラシー調査、IALSに関する報告書では、社会の複雑化や急激な技術発展の中でのリテラシーの重要性が強調されていたにすぎない。

(3)しかし、そのすぐ後に実施されたIALSの2冊目の報告書は1997年に刊行され、『知識社会のリテラシー・スキル』と題されている。

- (4)①同書では、「知識社会における職務では、増大する需要に応じて、高度なリテラシー・スキルが求められている」とし、
- ②「人口の大部分が低いスキルしか持っていないという事実は、個人だけでなく、家庭、地域社会、企業に大きな影響をもたらす」以上、
- ③「リテラシー・スキルは、市民が社会的、政治的、文化的生活を営み、社会に積極的、活動的に参加する上での本質的条件になってきた」と述べている。

5. (1)ここでの知識社会の像は、

- ①グローバルな市場の出現、
- ②知識に依存し情報を基盤とした経済や社会への移行
- ③インターネットの普及、
- ④そして世界貿易の自由化の発展とされ、
- ⑤高度なリテラシーが求められ、
- ⑥さらにその高度化が進むだろうというものである。

(2)①そして、単なる読む書きの能力だけではなく、

- ②高度化の進む他のコンピテンシーとともに読み書き能力を扱うことが現代社会に求められるようになってきたと述べている。

(3)1990年代は、知識社会という用語と同時に、経済社会において「コンピテンシー」という用語が頻繁に用いられるようになってきた。

(4)このコンピテンシーとして、どのようなものが教育や生涯学習の世界でも求められているのか、という問いに答え、リテラシーをコンピテンシーの一部として把握する必要性が生じてきたのである。

P26 ~ 27

II 3つのキー・コンピテンシー

1. (1)デセコの最終報告書では、コンピテンシーを「学習への意欲や関心から行動や行為に至るまでの広く深い能力、人間の根源的な特性」とであると定義した。

(2)職業教育の分野におけるコンピテンシーは、特定の職業の行動分析を通じて抽出される行動特性でもあり、職業の数だけ、あるいは能力の数だけその定義が生じると考えられる。

2. (1)デセコにおけるキー・コンピテンシーは、各国の討議から抽出された特に重要なコンピテンシーとされ、部分的なコンピテンシーではなく、理性と感情が生命上関連し合っているホリスティックな(総合的な)概念であるとして考えられた。

(2)コンピテンシーの定義と選択にあたっては、

- ①人生の成功や幸福をもたらすという個人の視点と、
- ②持続可能な発展と、社会的まとまりや公正と人権をもたらすという社会的視点がとられた。

3. (1)キー・コンピテンシーの定義は、「人が特定の状況の中で(技能や態度を含む)心理社会的な資源を引き出し、動員して、より複雑な需要に応じる能力」とされる。

(2)こうして、デセコでは、3つのキー・コンピテンシーを定義し選択した。

4. (1) 1つは自律的に活動する力であり、
- ①大きな展望の中で活動する力、
 - ②人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する力、
 - ③自らの権利、利害、限界やニーズを表明する力、が含まれる。
- (2) 2つ目は、社会的に異質な集団で交流する力であり、
- ①他者と良好な関係を作る力、
 - ②協働する力、
 - ③争いを処理し、解決する力、が含まれる。
- (3) 最後の1つは相互作用的に道具を用いる力であり、
- ①言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる力、
 - ②知識や情報を相互作用的に用いる力、
 - ③技術を相互作用的に用いる力、が含まれる。
5. (1) これらの3つはそれぞれが他のものの基礎となり、深い関連を持ち、共通の核心に「思慮深さ」(reflectiveness)がある。
- (2) いわば、3つのコンピテンシーは、
- ①個人の形成(自律的活動力)、
 - ②自らが関わる社会の形成(人間関係力)、
 - ③その2つの形成を支える道具を相互作用的に用いる力(道具活用力)から成り立つ。
- (3) ①このうち、相互作用的に道具を用いる力は、
- ② PISA において、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーとしての測定が行われている。
- (4) さらに、ALL では、3つのコンピテンシーとリテラシーやライフスキルの関連づけが行われた。
6. (1) このデセコ・プロジェクトの意義、とりわけ、OECD の調査にとっての意義について、PISA 等の国際調査の指標分析のイニシアティブをとるシュライヒャーは、次のように述べている。
- (2) ①「デセコの総合的な枠組みは、一層大きな概念的文脈の中に各調査を位置づけ、現在の調査の限界を知る方法を提供してくれる。
- ②キー・コンピテンシーの3つのカテゴリーは、より広い範囲のコンピテンシーを獲得する方向に向けて将来の調査方法を体系的に拡張する道標となる」。
7. (1) また、国際調査としての意義について、元カナダ統計局で ALL や IALS を運営したスコット・マレーは、次のように述べている。
- (2) ①「PISA の尺度は成人のコンピテンスの分布状況を分析し理解する基礎として十分であろう。

- ②しかしながら、IALS において収集された年齢別世代集団データの総合的な分析は時間とともに、そして時には技能への経済的・社会的に要求されるものに応じて、コンピテンシーのレベルが著しく変化しうることを物語っている。
- ③デセコにおいて認定されたキー・コンピテンシーを支える理論はさらに、成人の評価の必要性、すなわち多くのコンピテンシーは成年期にのみ発達することを説明している。
- ④学校教育修了後から数年間にわたる技能の進歩や退行という動的な過程はまだよく理解されていないが、予備調査の結果は進歩や退行が政策決定者の関心を引き、成人集団全体のコンピテンシーの調査経費を正当化するのに十分であることを示唆する」。

8. (1) さらに、国際調査の意義、特に PIAAC の意義を考える上で、次の示唆は興味深い。

- (2) ①「重要なことは、デセコ・プロジェクトがさらに、学校を基盤としたキー・コンピテンシーの評価に携わっている者と、成人のキー・コンピテンシーを評価している者をつなぐ架け橋(両者にとって重要な架け橋)として役立ってきたことである。
- ②学校を基盤とした評価の開発と実施に携わっている者にとっては、これまで測定されたことが現実世界の成人の学習成果をもたらしているかを知る必要がある。
- ③成人の技能評価に携わっている者は、問題となるコンピテンシーを教える手段を教育制度が持っているかどうかを知る必要がある」。

9. PIAAC の成人コンピテンシーの評価から、成人教育だけではなく、学校教育の成果もまた問われること、そして、調査の結果から、成人教育の学習内容に重要な示唆が得られるというのである。

P41 ~ 44

III コンピテンシーの定義

- 1. (1) PIAAC で用いられるコンピテンシーという用語は、デセコ(DeSeCo)の定義をもとにしている。
- (2) その点では、コンピテンシーとは、「学習への意欲や関心から行動や行為にいたるまでの広く深い能力、人間の根源的な特性」ということができる。
- (3) また、キー・コンピテンシーとは、「人が特定の状況の中で(技能や態度を含む)心理社会的な資源を引き出し、動員して、より複雑な需要に応じる能力」のことである。
- 2. (1) ただ、コンピテンシーの上記の定義では、リテラシーや知識、技能とどのように異なるかがわかりにくい。
- (2) この点について、EU のキー・コンピテンシーに関する協議の中で、次のような展開がみられる。
- (3) 当初、EU では、キー・コンピテンシーではなく、「new basic skills」という表現を用いていた。
- (4) そのスキルが、キー・コンピテンシーに代わったのは、次のような理由からである。

3. (1) まず、**skill** が **competencies** に変化した理由として、…
- ① **skill** は、英語以外の言語では **competencies** と区別するのが難しい、
 - ② **competency** は、スキル、知識、態度の組み合わせとして考えられる、
 - ③ 多くの場合、**basic** は、読み書きのスキルやニューメラシーの限定的な集合を暗黙のうちに意味してしまい議論の中で混乱を生みやすい。しかし、**key** は、もっとダイナミックな用語であり、この暗黙の意味をもたない。
 - ④ 同じ理由で多くの人が **basic** という意味から **survival skill** を考えてしまうが、現代における **skill** の議論は、単なる生き残りを超える以上の問題になっている。
- (2) こうした理由から、EU では、「**skill**」ではなく、「**competence**」を用いるというのである(ただし、EU の最終提言では、**key competencies** と綴りも変化している)。
4. また、キー・コンピテンシーを全ての人が習得する重要性について、EU の提案では、次の 3 つの理由を挙げている。
5. (1) ① 第一に、人生を通じての自己充足(**self-fulfillment**)と発達である。
② 個人的な関心や動機づけに始まり、生涯学習を続ける気持ちになるように人生の個人的な目標が実現できることをキー・コンピテンシーの目標にする。
- (2) ① 第二に、社会参加の機会(**social inclusion**)である。
② 誰もが社会における活動的な市民として参加できるような力をキー・コンピテンシーがもたらす必要がある。
- (3) ① 第三は、雇用可能性(**employability**)。
② 労働市場で適正な職が得られるような力を各人にもたらすことである。
6. こうして、この提案では、キー・コンピテンシーをその単数形について次のように定義している。
7. (1) 「コンピテンス(**a competence**)は、知識、技能と態度の組み合わせを含む複合的な属性(**attribute**)」である。
- (2) これは、学校教育、インフォーマル、ノンフォーマル、意図的、無意図的といったいろいろな文脈で獲得される。
- (3) キー・コンピテンス(**a key competence**)は、次の条件を備える。
- (4) いろいろな状況や文脈に応じて移転可能であり、適用できる。いくつかの目標を達成しようとしたり、多様な問題を解決したり、多様な職務を遂行できるといったように多機能的である。
- (5) すべての人が、特殊な状況や課題の要求に適切な回答を示し、生活、労働やそれに関わる

学習を行い、十分な個人的成果をあげるための必要条件である。

(6) 言い換えれば、個人の実際的な遂行にとって予測的な価値を持つ」。

8. (1) つまり、「知識だけではなく、技能も含み、さらに態度的な側面を含むのがコンピテンシーである」というのが、もっともわかりやすい説明になるだろう。
- (2) そして、キー・コンピテンシーとは、そのコンピテンシーを高めていくことによって、多様な課題に応じていろいろな資源を活用できる総合的な力であり、それは状況が変わっても活用できる力であり、単なる問題の応用力ではない人間の根源的な力ということである。
- (3) この点についてたとえば、OECD の多様な研究成果を利用して『ヒューマン・キャピタル』を著したブライアン・キーラーは、コンピテンシーが現代の教育にとって不可欠のものであるとして、次のように説明している。
9. (1) 「あらゆる教育は非常に有用なものではあるが、真に効果的であるために教育は、人々が現代世界を通して自らの道を進んでいくのを手助けするような、より幅広い一連のコンピテンシーを与える必要がある。
- (2) ここでいうコンピテンシーとは、ただ知識というだけではないし、技能というだけでもない。それは両方の要素を含みつつも、態度を含むものである。
- (3) 例えば、われわれが違う国の誰かにメッセージを送ろうとすると、われわれは知識を必要とする。
- (4) この場合、1 つ以上の言語の知識だ。
- (5) また、技能も必要とされる。
- (6) おそらく E メールを送るのに必要なコンピュータの技能だ。
- (7) しかし、うまくコミュニケーションがとれたとすると、われわれがコミュニケーションしている人の文化的な関係を理解しようとする態度やアプローチもまた、必要とされる。
- (8) これらの知識や技能、態度という要素を 1 つにすることで、コンピテンシーの基礎が形成されるのである」。
10. 知識や技能だけではなく、動機や態度を含み、そうした内的な資産・資源と外的な資産や資源を活用し、多様な課題を解決して成果を生み出していく力が、コンピテンシーというわけである。

P46 ~ 49

IV 「生涯学習のためのキ・コンピテンシー」提言

1. ヨーロッパの生涯学習を各国で推進するよう改善を求めた 2000 年のリスボン戦略会議の要請を受けて、2006 年に EC が出した提言。正確には、「生涯学習のためのキー・コンピテンシー：ヨーロッパ準拠枠組み」と題し、30 개국、13 の国際機関が参加し 40 名近い専門家グループに

よるワーキンググループにより、各国の教育目標モデルとなる次の 8 つのコンピテンシーが提言された。

2. (1) 第一言語でのコミュニケーション、
(2) 外国語でのコミュニケーション、
(3) 数学的コンピテンシと科学技術の基礎的コンピテンシー、
(4) デジタル・コンピテンシ、
(5) 学習法の学習、
(6) 社会的・市民的コンピテンシー、
(7) 進取の精神と企業家精神、
(8) 文化的気づきと表現。

3. この提言では、キー・コンピテンシーを生涯学習の重要な必需品とするが、恵まれた人々だけが楽しむことを学び、自分を深めようとするような格差社会の危険性に対処し、人間関係や職業的内容といった外的なものだけではなく、全ての人々が個人の内面を豊かにし生き甲斐を追求できるような、一般教養としての「文化的気づきや表現力」も加えている点が特色である。

P200

[コメント]

立田慶裕先生をリーダーとする国立教育政策研究所の国際成人力研究会による OECD 国際成人力調査(PIAAC、Programme for the International Assessment of Adult Competencies)に関する最新の著作がようやく出版された。この調査は長い準備の末、日本でも 2011 年 8 月から 2012 年 2 月にかけて国内に在住する 16 歳から 65 歳までの成人の中から無作為抽出された 5000 名余りの方を対象に行われ、調査結果は、2013 年 10 月に世界同時の公表予定だ。本書を通じて十分に PIAAC の歴史と趣旨、内容を理解した上で、結果の発表を待ち、その活用方法を今から考えたい。先行する PISA 調査や、この PIAAC 調査をはじめ、OECD の調査・分析の成果を国や地域の発展のために活用することが、すべての国の一人ひとりの国民のよりよき生活に直結すると確信する。

— 2012 年 10 月 10 日 林 明夫記 —